

中観派二諦説の思想的展開

金子宗元

問題の所在

ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 150 ~ 250)¹⁾ の主著である『根本中頌』 (*Mūlam-adhyamakakārikā*) 第24章第8偈~9偈において、極めて簡潔に示された二諦説は、彼の意図した学説より、恐らくは大幅に逸脱し、その後のインド仏教史における二つの大きな思想的潮流によって変容と展開を遂げた。それらは、唯識学説と如来蔵思想の台頭と、ダルマキールティ (Dharmakīrti, 600 ~ 660)²⁾ の登場とである。

このうちの後者、即ち、ダルマキールティによって大成された仏教論理学の、後期中観派による受容における問題の所在と私見に関しては、別途に発表中の拙稿に委ねたい³⁾。一方、前者、即ち、唯識学説を批判することが、中期中観派の学匠達にとっての中心課題の一つに成ったことは論を待たないであろう。然しながらその一方で彼らは、弥勒系論書に基づいてナーガールジュナの二諦説を解釈したのである。従って、本稿の目的は、ナーガールジュナの二諦説が、中期中観派の学匠等によって、弥勒系論書に基づいて解釈されたことによって、変容を遂げた点を解明することにある。

『根本中頌』に説かれる二諦説の問題点

『根本中頌』において二諦説が直接言及される唯一の箇所である、第24章第8偈~第9偈⁴⁾は、以下の様なものである。

諸仏の説示 (buddhānāṃ dharmadeśanā) は、二諦に依拠してから (samupāśītya) [行われる]。世間世俗諦 (loka-saṃvṛtisatyā) と、勝義よりして諦であるもの (satyaṃ ca paramārthataḥ) である。(MK24-8)

およそ誰であれ、この二諦の区別 (anāyora-vibhāgaṃ satyadvayoḥ) を了知しない (navijānanti) 者達、①彼等は、仏陀の教説において、甚深なる実義を了知しない (te tattvaṃ

na viānanti gambhīram buddhaśāsane//). [②彼等は、甚深なる仏陀の教説において、実義を了知しない。(te tattvaṃ na vijānanti gambhīre buddhaśāsane//, or-gambhīrabuddhaśāsane//).] (MK24-9)

言説に依拠してからでなくては (vyavahāram anāśrītya), 勝義は (paramārthah) 説示されない。勝義に到達してからでなくては (paramārtham anāgamyā). 涅槃は証得されない。(MK24-10)

以上の計三偈が、『根本中頌』において二諦説が言及される唯一の箇所である。このうち第8偈で「諸仏の法の説示」の所依として二諦が示され、更に第10偈では、世俗から勝義、涅槃へという縁起的な階梯が説かれていることに注目しておきたい。そこで問題としたいのが、第9偈であるが、この第9偈のテキストの後半部分に計三種類の異説が確認される事、及び、拙訳中に示した②のテキストによって①が、校訂されるべき事が、既に斎藤明⁶⁾氏によって詳細に報告されている。私見によれば、この斎藤氏の業績は、中期中観派以降の二諦説解釈の展開の在り方を鑑みるならば、ナーガールジュナの二諦説研究に新解釈をもたらす、非常に重大な、画期的な発見である。

①と②との根本的な相違は、‘gambhīra’ (甚深なる) という形容詞が、‘tattva’ (実義) を限定するのか、あるいは ‘buddhaśāsana’ (仏陀の教説) を限定するのか、という点にあるが、この語は、『律蔵』(Vinayapīṭaka)「小品」(Mahāvagga)⁷⁾の、いわゆる、梵天勸請の説話において、釈尊自らが証得した法を「甚深なる」(gambhīra)もの、と述べて以来、釈尊によって証得された法が、他の者達によっては到底理解し難い、深遠なものであることを形容する際に使用される語であることは周知の通りであり、『根本中頌』第24章においても同様な意味で用いられていることは、同章第12偈の所説に明白である。ここでもしも、①の読みに従う場合、直前の第8偈において「諸仏の法の説示」の所依として二諦が位置付けられ、それらが、「世間世俗諦」と「勝義よりして諦であるもの」と定義付けられていることを考慮するならば、その中での深遠なもの、即ち、「甚深なる実義」とは、言う迄もなく勝義諦であると理解される事に成るであろう。実際にバーヴィヴェーカ (Bhāviveka⁸⁾, 清弁, 490～570ca.)⁹⁾ やチャンドラキールティ (Candrakīrti, 600～650)¹⁰⁾等は、他でもなくその様に注釈しているのである。

然しながら私見によれば、彼らの様に「実義」を「勝義諦」とであると看做す解釈は他ならぬ『根本中頌』の文脈においては、全く不適切なものであると言わざるを得ない。それは、既に確認した『根本中頌』第24章第17偈の所説と、第18

章第9偈に説かれる「実義の定義」とを比較するならば、一目瞭然であろう。第18章第9偈は、非縁起的な実在として「実義」を定義したものであるのに対して、第24章第10偈は、言説に依存して勝義が、勝義に依存して涅槃が、という縁起説が説かれているに他ならない。即ち、第24章第10偈において勝義は、「言説」という“他のものを縁とするもの”なのであり、言説に依拠しても説示され得ないとは表現されていないから、“諸々の戯論によって戯論されていない”とも定義されていないのである。従って、『根本中頌』の文脈において、強いてはナーガールジュナの所説において、勝義を、実義であると確定することは困難であると思われる。従って、私見によれば、論旨より判断しても、『根本中頌』第24章第9偈の読みとして適切なものは、①ではなく②であると結論するべきである。更に附言しておかなければならないのは、この②に従うならば、第24章第9偈においては、「実義」も、「二諦の区別」も、必ずしも肯定的には説かれてはいないということである。むしろ、“二諦の区別を了知しないこと”及び、“実義を了知しないこと”が、肯定的に説かれているかの如くである。また、ここに披露した私見が、もしも妥当なものであるならば、ナーガールジュナの二諦説に関して、中期中観派以降の学匠達によって理解されていた二諦説とは、大きく異なる解釈がもたらされることに成るであろう。

中期中観派の二諦説

先述した様に、中期中観派の二諦説の特徴の一つとして、弥勒系論書に見られる学説の受容が挙げられる。

そのうち、バーヴィヴェーカの勝義諦解釈が、ヴァスバンドウ (Vasubandhu, 400～480年頃、別説320～400年頃)の『中辺分別論註』(Madhyāntavibhāgabhāṣya)に基づいていることは、齋藤明¹¹⁾氏によって既に指摘されているが、バーヴィヴェーカが、「勝義」という語を依主釈 (tatpuruṣa) によって解釈する際に、「無分別知 (nirvikalpajñāna)」という概念を導入する契機となったのは、同語が現れる『中辺分別論註』だけではなく、『根本中頌』第18章第9偈に説かれる「実義の定義」の中に見られる「無分別」(nirvikalpa) という語と、『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi)「実義品」(Tattvārthapaṭala)における次の様な一説に基づいた為と見なすべきであろう。

更に、一切諸法にとっての、かの、勝義的な自性 (pāramarthaikaḥ svabhāvaḥ) とは、無分別知だけの (nirvikalpasyaiva jñānasya) 行為領域 (gocaraḥ) であると知られるべきである。¹²⁾

また、チャンドラキールティの二諦説の理論的構造が、弥勒系論書にその背景芽を求め得る事に関しては、私がかつてその一部を論じた¹³⁾が、今ここでは、新たな研究成果をも含めて紹介しておこう。彼の二諦説の中核を為す理論は、以下の様な『入中論』(Madhyamakāvātāra) 第6章第28偈に顕著である。

愚痴 (moha) は、実に、自性を覆障すること (svabhāva-āvaraṇa) から、世俗 (saṃvṛti) なのである。それ [即ち、世俗] によって、およそ何であれ、諦 (satya) なるものとして顕現する、作られている (kṛtrima) もの、他ならぬそれが、世俗諦 (saṃvṛtsatya) であり、また、作られた (kṛtaka) ものである句義 (padārtha) は、世俗 (saṃvṛti) であると、かの牟尼は、詩に賦した (jagāda)¹⁴⁾。

ここで覆障されるものとされる自性は、勝義諦と看做され、『明句論』(Prasannapadā) では実義と表現されるものであるが、これは、実は、ナーガールジュナが『根本中頌』第15章第1偈～第2偈において定義したものに他ならない。一方、覆障するものは、自性ならざるものとしての一切諸法であり、世俗諦である。ここで、「作られているもの」を「諦」と見做すか否かは、「有染汚の無明 (kliṣṭāvidyā)」の有無に関わり、また、覆障するものである一切諸法が顕現するか否かは、「所知障を特質とする無明 (jñeyāvaraṇalakṣanāvidyā)」に関わる。ここで、実義と、それを覆障するものとの二項間において理論を構築する在り方は、『大乘莊嚴經論 (Mahāyānasūtrālamkāra)』功德品第53偈～第54偈に基づいたものであり¹⁵⁾、更に、世俗の語義解釈も『宝性論 (Ratnagotravibhāga)』の一説に基づいていた可能性がある¹⁶⁾ ことに関しては、既に指摘した。更に、私見によれば、「有染汚の無明」と「所知障を特質とする無明」を用いた理論構築に関しても、「転依」(āśrayasya parāvṛtti) を巡る弥勒系論書における議論や唯識派の理論と深く関連している。これに関しては、今後の課題としたい。

頁数、行数の調整の為、略号・註を削除させて頂きました。

〈キーワード〉 中観、二諦説、ナーガールジュナ、チャンドラキールティ、弥勒系論書
(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門、仏博)